

# 跳び箱運動における文化的な価値と運動技能の関係性

加納 岳拓\*・岡野 昇\*\*・山本 俊彦\*\*・伊藤 暢浩\*\*\*

## Relationship between cultural value and motor skill in vaulting box activities

Takahiro KANO, Noboru OKANO, Toshihiko YAMAMOTO and Nobuhiro ITO

### 要 旨

本稿では、跳び箱運動における障害物克服のための技能を見直すために、文化的な価値を味わうための技能について検討し、跳び箱運動の文化的な価値と運動技能の関係性について明らかにすることを目的とした。

その結果、跳び箱運動とは、支持によって生まれる空中局面を味わうことが文化的な価値であると整理された。また、向山の「教育技術法則化運動」を批判的に捉えながら、文化的な価値と支持の関係の検討から、①支持とは左右軸回転を生み出す機能として働くということ、②支持のためには「しめる（働きかける）－緩める（働きかけられる）」ことが大切であるということ、③「しめる－緩める」の切り替えが起こるような「間」づくりの機能が不可欠な要素であることが明らかにされた。この3つの視点を持ちながら、運動状況の設定、子どもの運動を観察することで、局面のおもしろさを味わうことが可能になると考察された。

### 1. はじめに

現在の学校体育は、産業社会から脱工業社会に移行した昭和50年代から、ホイジンガ(1963)やカイヨワ(1970)のプレイ論に基づいた運動の機能的特性を中核とする「楽しい体育」による学習が構成されている。カイヨワは、人間の欲求やプレイに向かう原動力によってプレイを分類しており、その中で跳び箱運動は、物的障害(跳び箱の高さ)に挑戦する克服型と観念的基準(新しい跳び方など)に挑戦する達成型のアゴンの運動として位置づけられている。このため学校現場では、「易しい(とされている)低い跳び箱や技から、徐々に難しい(とされている)高い跳び箱や技へ挑戦する」というような授業が多々展開されており、教師は子どもたちに跳びこす喜びを感じさせようと指導を行っていると言えるだろう。

ここで注目されたのが、向山洋一による「教育技術法則化運動(以下、法則化運動と表記)」である。向山(1982)の『跳び箱はだれにでも跳ばせられる』では、腕支持をする際に、「手でかくように」して肩を

前に出し、障害物を後ろに押しやることによって、からだの前への移動を行うという体重移動技術を中核としながら、段階的な指導方法によって、どの子どもでも跳び箱を跳びこすことができるとしている。向山の考え方や指導方法は、教師にとってわかりやすく、子どもに提供しやすいということから学校現場に積極的に取り入れられた。

このように、「跳びこす」ことが大切であり、できるからこそ楽しいという運動の捉え方は、運動を実体的に捉え、目的合理的・効率的に獲得するといった「規範的パラダイム」が背景にあると考えられる。しかし、本来の機能的特性は、人間と運動との関係から生まれる文化的な価値(おもしろさ)を味わうという、「解釈的・批判的パラダイム」(藤田, 1995)から運動が捉えられている。つまり、「規範的パラダイム」に傾斜することは、機能的特性の本来の運動の捉え方とはずれを生じており、また子どもにとっても、楽しみごとではなく解決すべき課題として位置づいてしまう恐れがあると考えられるのである。機能的特性の原点に立ち返ると、跳び箱運動では跳びこすという結果で

\* 三重県四日市市立内部東小学校

\*\* 三重大学教育学部

\*\*\* 三重県津市立南が丘小学校

はなく、跳んでいる運動過程の出来事に着目する必要があるだろう。

そこで本研究では、跳び箱運動における障害物を克服するための技能を見直すために、文化的な価値を味わうための運動技能について検討し、さらに、跳び箱運動の文化的な価値と運動技能の関係性について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

- (1) 「解釈的・批判的パラダイム」から捉えた跳び箱運動の文化的な価値を整理し、法則化運動の跳び箱運動との相違点を、跳び箱運動の源流や器械の意味、着手の役割という視点から比較する。
- (2) M 大学教育学部の専門科目である「体育教材研究演習」で行われた跳び箱運動の事例を、「授業実践（関与観察）－記録－記述－解釈」（本山，1999）という一連の調査行為からなるエスノグラフィー（民族誌）の方法を用い、跳び箱運動の文化的な価値を味わうための「支持」について明らかにする。
- (3) 跳び箱運動の文化的な価値と運動技能の関係性について考察する。

## 3. 跳び箱運動の文化的な価値からみた腕支持の機能

体育で取り扱われている跳び箱運動とは、どのような運動なのだろうか。文化として受け継がれてきている運動は、人間とその周囲の他の状況と関わりながら、たえず変容を重ねてきているが、佐伯（1999）は、カルチュラル・コンテクスト（文化的脈絡）をつかむこと、森島（2006）は歴史的な不変更である「文化的特性」を導き出すことで、運動の文化的で中心的な価値を明らかにする手がかりになると述べている。また、生田（1987）は、わざの「世界全体の意味把握とは、自らが潜入している空間に存在する有形、無形の事柄の意味関連を身体全体を通して把握すること」であると述べており、伝承されている形だけではなく、そこに先人が込めた意味まで味わい、受け継ぐことの大切さを示している。そこで、金子（1987）、稲垣（1987）をもとに、跳び箱運動の歴史と、そこで大切にされている文化的な価値について整理する。

跳び箱運動の歴史について概観すると、跳び箱運動の源流には2つの流れがみられる。1つは、誕生したところのトゥルネン（ドイツ体操）やスウェーデン体操、デンマーク体操で行われていた跳び箱運動のように、跳び箱を体力づくりや多様な運動訓練のための器械・器具とみなし克服することが目的とされた運動である。

もう1つは、子どものプレイやトゥルネンの中から発展してきたような馬とびや乗馬術という巧技として色々な跳び方を楽しむ運動である。プレイや巧技としてのドイツ体操のように、心身鍛錬から徐々にスポーツとして扱われるようになった跳び箱運動は「支持跳躍運動」と言われる、足で踏み切って手で支えるという機能を前提として成立している運動である。

支持跳躍が特徴である跳び箱運動の過程は、ただ「跳びこす」という単独の運動構造ではなく、図1のような基礎構造から成り立っている。また、①助走、②踏み切り、③第一空中局面、④着手（腕支持）、⑤第二空中局面、⑥着地の6つの運動が、一連の流れの中で密接にかかわり合いながら構成されている運動とされている（長野，1996）。

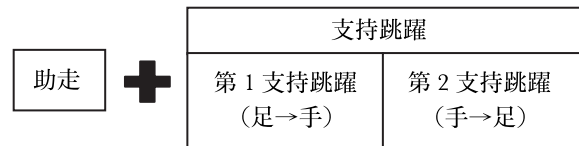


図1 跳び箱運動の基礎構造（金子，1987，p.54）

さらに、現在にまで伝承されてきている跳び箱運動は、〈切り返し系〉と〈回転系〉という、大きく2つの型に分類されている。〈切り返し系〉では、③第一空中局面で行われている前方の左右軸回転を、④着手によって⑤第二空中局面を後方の左右軸回転とするのに対し、〈回転系〉では、③第一空中局面の前方への左右軸回転を④着手後の⑤第二空中局面も続ける運動である。この2つの型の違いは、腕支持からの第二空中局面の跳躍姿勢の違いにみられると言えるだろう。そして、相馬は、「今日の跳び箱運動は、支持跳躍運動と言われ、雄大で安定した第2飛躍局面が求められるのである。言い換えるならば、跳び箱運動は、第2飛躍局面にその技の成果を示すように跳び越さなければならないもので、第2飛躍局面を、主要局面とするものである」（相馬，1992，p.244）と述べ、2つの空中局面の中でも、第二空中局面に焦点を当てていくことの重要性を述べている。

現在、学校体育で行われている跳び箱運動は、訓練を主な目的としていたドイツ体操・スウェーデン体操・デンマーク体操と、生涯スポーツの視点から運動が捉えられている（堀江ら，2007）。この2つの流れを明確に区別せず、混同して扱われていることによって、跳び箱を障害物と見立て、障害物を克服することが本質である克服スポーツとして認識されている（相馬，1992，p.243）。言い換えると、支持跳躍による第二空中局面という文化的な価値が大切にされず、手をつけて跳びこすことに終始する学習が展開されてしまうの

跳び箱運動における文化的な価値と運動技能の関係性

である。

一方で、文化的な価値を味わうという立場から捉えた跳び箱運動では、第二空中局面の雄大さや豊かさを中心に据えた運動過程を大切にしている。そして、跳び箱を空中局面へ誘う器械として捉え、腕支持は大きな運動量を受け止めるとともに、第二空中局面に向けてからだを上方へ跳ね上げるという役目（「手でジャンプ」することでからだを空中へ投げ出す）を負っているとみる必要があるだろう。つまり、跳び箱運動では、跳びこすという結果ではなく、第二空中局面の雄大さという過程に文化的な価値があり、結果として〈切り返し系〉や〈回転系〉の技が価値あることとして伝承されている。そのため、教師は、子どもたちにこの意味が生まれてくるような状況づくりや働きかけが大切であると言えるだろう。

しかしながら、向山（1982）が提唱する法則化運動をもう一度みつめ直してみると、跳びこすという事実のみがピックアップされ、第二空中局面を豊かにするという文化的な価値として、受け継がれている視点が抜け落ちていると言えるのではないだろうか。そして、跳び箱を障害物とみなし克服しようとすることによって、腕支持はからだを前方に運ぶための体重移動の役割として機能していると言えよう（表1）。

4. 大学生を対象とした跳び箱運動の事例

本稿で取り上げる跳び箱運動の事例は、M 大学教育学部において 2008 年度後期に開講され、教育学部・

教職に関する科目である「体育教材研究演習」で行われたものである。事例の詳細と検討方法は次の通りである。

日時：2008 年 12 月 2 日（火） 14：30～16：10

場所：M 大学第一体育館

運動者：M 大学大学院 1 年生 1 名

M 大学教育学部 4 年生 5 名

M 大学教育学部 3 年生 2 名

助言者：助言者 A（M 大学教授）、助言者 B（M 大学准教授）、助言者 C（大学院 1 年生）

運動：連結跳び箱（図 2 参照）

記録方法：連結跳び箱の運動過程や試技者と助言者のやりとりが見られるような視点からデジタルビデオカメラ SONY DCR-TRV 70 を使用して撮影する。

記述方法：連結跳び箱の運動過程を助言者 C によって収録したビデオ記録から運動過程を写真で切り取る。

解釈方法：試技者の運動過程を特徴ごとに分類し、その運動過程がどのような指向性をもっているのか、そのときの器械や支持の役割について検討する。

考察方法：解釈を基に、文化的な価値が生み出される支持の役割について考察する。

「体育教材研究演習」では、「これまでの教材研究・運動実践・教育実習で得られた経験をもとにし、小学

表 1 2つの立場からみた跳び箱運動・腕支持の意味

	文化的な価値としての跳び箱運動	向山の法則化運動
背景	プレイ・ドイツ体操を基にした巧技	巧技と訓練としての跳び箱の混同
運動の意味	第二空中局面の豊かさ（過程）	障害物を跳びこすこと（結果）
腕支持の意味	からだを上方への跳ね上げ	体重移動

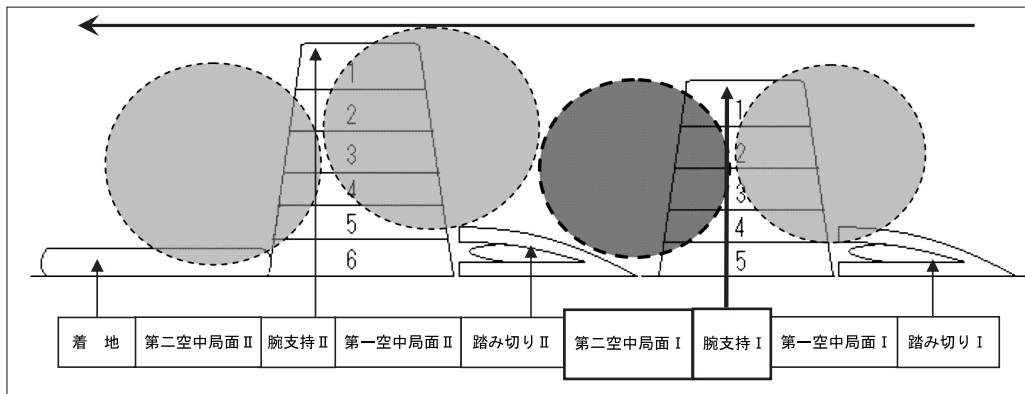


図 2 連結跳び箱

校体育の諸場面を対象とした『自らの問題』を探し、それを受講生で共有しながら、小学校体育授業の計画、方法、教材開発、授業研究等のあり方を探求することが目的として掲げられている。授業実践記録やテーマに基づく問題提起を担当者が作成し、受講者全員で共有する中で、『授業の意味解釈（「何を、どのようにみればよいのか」という観察の視点）』の形成が目標とされている授業である。

この授業の中で、現在の学校体育で行われている跳び箱運動が、跳びこすことが目的となり、跳び箱でもっとも重要とされる腕支持が、体重移動や安全な着地のための技術となっていることに問題意識をもち、跳び箱運動についての検討を行った。検討は、図2のような場を用いて、運動実践を通して行った。

この場の特徴は、図2に示したように、6つの運動構造からなる非循環運動である跳び箱運動を循環運動としたことにある。運動は、準備局面、主要局面、終末局面という3分節からなるが、循環運動とは、終末局面と次の導入動作が「中間局面」として1つに融合されることに特徴がある（マイネル，1981）。連結跳び箱では、1つ目の跳び箱の着地と2つ目の跳び箱の踏み切りという、独立した2つの運動をスムーズに融合させることが求められる〈踏み切りⅡ〉。

すなわち、〈踏み切りⅡ〉を正確かつ、強く踏み切るためには、〈第二空中局面Ⅰ〉から安全に着地することだけでは成り立たない運動状況と言えるだろう。そして、正確に強く踏み切るためには、前方の左右軸回転を〈腕支持Ⅰ〉の突き放しによって、後方の左右軸回転にしなければならないこと、跳び箱の〈第二空中局面Ⅰ〉が、雄大になるということが不可欠になってくる場と考え設定した。

## 5. 立ち現れてきた3つの跳び方（タイプ）とそれぞれの運動・器械の意味

図2の場で行った跳び箱運動の形態を分類すると、3つのタイプに分けることができる。

1つ目のタイプは、跳び箱を障害物として捉え、跳びこえることを目指して跳躍しているタイプである。写真1では、勢いのよい助走、強い〈踏み切りⅠ〉、上体を前に送ることを助ける〈腕支持Ⅰ〉によって、1台目では、スピード感のある跳びこしとなっているが、〈腕支持Ⅰ〉による切り返し運動が弱いために、勢いそのままに〈踏み切りⅡ〉へ入っており、踏み切り姿勢が取れていない。つまり、着地と踏み切りがスムーズに融合されていないとみることができる。写真2では、2台目の跳び箱も跳びこそうとする意思はあるが、写真1と同様の運動過程を踏んでおり、〈踏み切りⅡ〉が正確に強く行われていない。そのために、これまでの勢いが消え、その結果、〈腕支持Ⅱ〉では、体重移動によって前方へ運ぼうとしている。写真3では、〈踏み切りⅡ〉を見据えて、助走から〈踏み切りⅠ〉、〈第一空中局面Ⅰ〉の勢いを抑えながら入っているが、〈腕支持Ⅰ〉が切り返しを生む機能としてではなく、上体を前方へ運ぶ機能であるために、前方へ低い〈第二空中局面Ⅰ〉となり、その結果、余裕をもてずに〈踏み切りⅡ〉に入っていると言えるだろう。〈踏み切りⅠ〉のように強く踏み切ることができていないことで、〈腕支持Ⅱ〉の体重移動によって2つ目の跳び箱を跳びこえているとみることができる。

2つ目のタイプは、写真4のように、〈第一空中局面Ⅰ〉を重視した跳び方である。〈踏み切りⅠ〉において上方へ跳び出すことによって、大きな前方の左右軸回転を伴った〈第一空中局面Ⅰ〉が生まれている。しかし、この大きな〈第一空中局面Ⅰ〉によって、〈腕支持Ⅰ〉の機能が運動を受け止め、安全に着地す

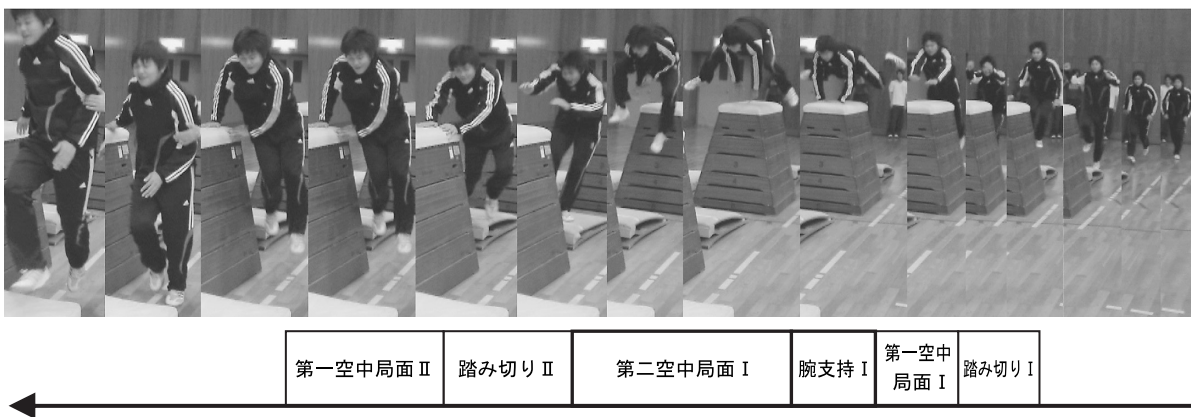


写真1

跳び箱運動における文化的な価値と運動技能の関係性

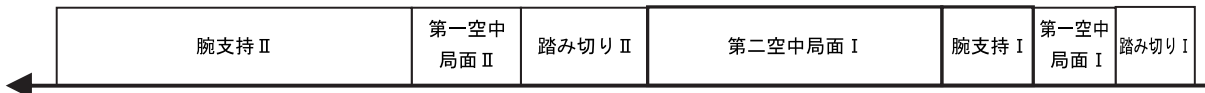


写真 2

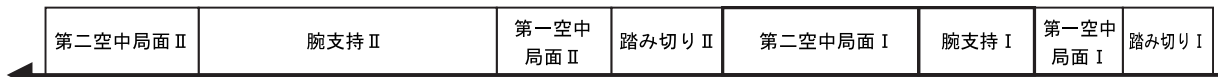


写真 3



写真 4

ということだけになっており、〈第二空中局面Ⅰ〉の雄大さが生み出されずに、小さくなっている。その結果、着地と踏み切りの融合がうまくできていないために、〈踏み切りⅡ〉に対応できずに崩れてしまっている。

3つ目のタイプは、腕を先行させ、からだ全体で前転運動を生み出そうとしている第一空中局面（写真5）と、第一空中局面の前転運動を腕支持の瞬間に後方への左右軸運動へ切り返している（写真6）という違いがみられるが、〈第一空中局面Ⅰ〉、〈第二空中局

面Ⅰ〉ともに大きく、2つの局面を大切にしている跳び方である。〈踏み切りⅠ〉からの前方への左右軸回転が生まれ、さらに〈第一空中局面Ⅰ〉から〈腕支持Ⅰ〉による突き放しによって、前方の左右軸回転が、後方へ切りかわっており、大きな〈第二空中局面Ⅰ〉が生まれている。そのため、徐々にからだがり上がり、〈踏み切りⅡ〉に余裕をもって入っているように見える。そのために、1つ目、2つ目双方の跳び箱における、踏み切りから第一空中局面に入る姿勢や

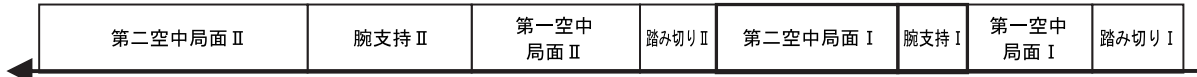
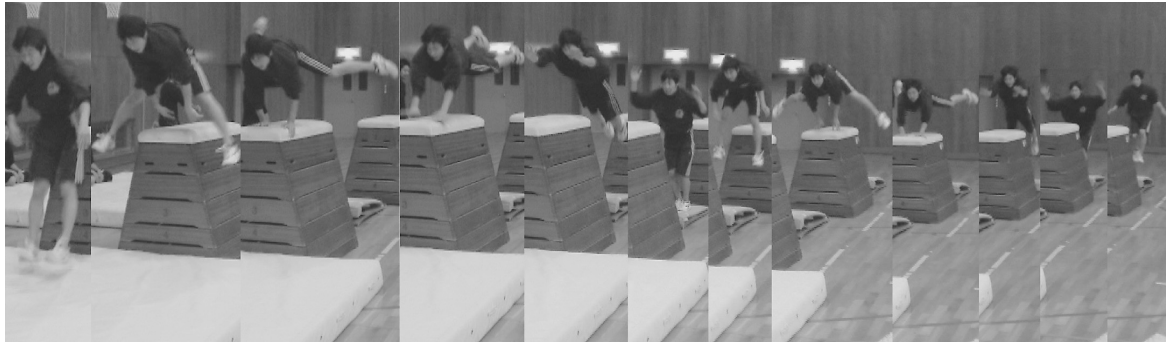


写真 5

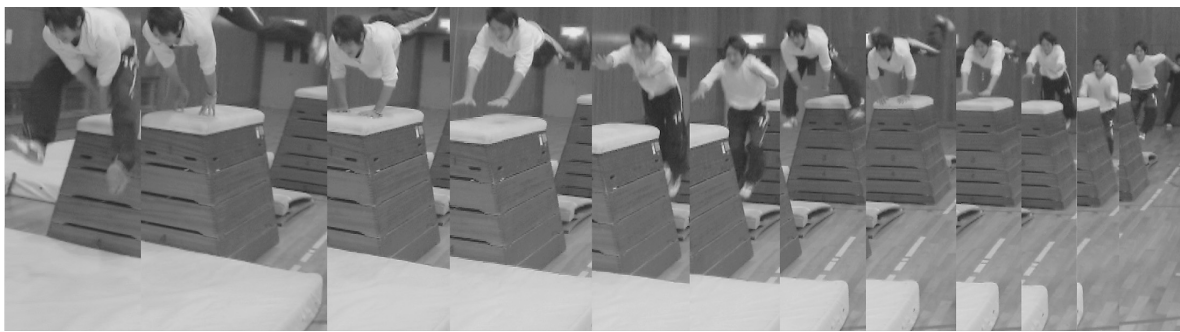


写真 6

表 2 跳躍のタイプ別にみた運動・器械の意味

	タイプ 1	タイプ 2	タイプ 3
ロイター板の意味	跳びこすための補助	第一空中局面を生み出す	第一空中局面を生み出す
跳び箱の存在	障害物	おもしろさを生み出す器械	おもしろさを生み出す器械
運動の価値	跳びこえること	空中局面の雄大さ	空中局面の雄大さ
腕支持の意味	体重移動	運動を受け止める	第二空中局面を生み出す

勢いがほぼ同様となっている。

上記の3つのタイプを、運動者がどのような指向性をもっているのか、またそのとき、ロイター板や跳び箱の器械がどのような存在であるのかを表2に整理をした。

タイプ1では、現在の機能的特性で捉えられた克服としての運動であり、向山の考えが具体化されたときの姿であると考えられる。また、タイプ2のように〈第一空中局面Ⅰ〉を大切に跳躍も、できるだけ跳び箱の遠くへ腕支持することによって跳びこすことが容易となるという障害物克服の捉えが背景にあると考えられる。または、空中局面のおもしろさを味わおうとしているものの、それは、1つの空中局面からなる運動（トランポリンなど）の価値であり、2つの空

中局面が特徴である跳び箱運動のおもしろさには触れていないと考えられる。

それに対し、タイプ3では、ロイター板・跳び箱ともに、運動者を空中局面のおもしろさへ誘う器械として捉え、また腕支持では、跳び箱を突き放し、大きな空中局面を生み出そうとしている。この腕支持とは、跳びこすことを達成するためではなく、大きな空中局面に待っているおもしろさを味わおうとするための技術として機能していると考えられる。

## 6. 空中局面を生み出す「支持」運動

それでは過程としての空中局面のおもしろさに触れるためには、どのような視点が大切なのであろうか。

そこで、第二空中局面を生み出すために不可欠な突き放しによる腕支持の技能、加えて局面を生み出すことでは同様に不可欠な踏み切り（足支持）の機能について考察することとする。

#### (1) 左右軸回転を生み出す支持

これまで述べてきたように、跳び箱運動とは、単なる跳びこすという跳躍運動ではなく、前方・後方の左右軸回転から成り立っている運動である。さらに、第一空中局面の前方の左右軸回転から第二空中局面の後方への左右軸回転へ変化させる〈切り返し系〉では、腕支持は重要なポイントを担っていると言えるであろう。これは、写真1、写真2、写真3の〈腕支持I〉のように跳び箱を跳びこえるために、からだを前方に移動させる、あるいは、写真4のように大きな運動を受け止め、安全に着地するための機能とは、大きく異なり、空中局面を味わうためには重要な視点と言えよう。

これまで、腕支持に注目してきたが、踏み切り（足支持）動作も同様のことが考えられる。写真1、写真2、写真3のように障害物を跳びこえるための勢いと力強さだけが、踏み切り（足支持）では必要とされるのではなく、前方への左右軸回転を生み出す機能として位置づいていることを押さえておかなければならないだろう。写真5、写真6の〈第一空中局面I〉から〈腕支持I〉をみると、からだは地面と平行となつてから腕支持を行っている。これは、空間を平行移動しているのではなく、軸回転を空中で行っていると言える。

#### (2) からだのしめによって生まれる突き放し

次に、第一空中局面の前方の左右軸回転を後方の左右軸回転に切り返すために、腕支持では「突き放し」という技術が必要とされている。この突き放し技術が、どのように生まれるのか考察していくこととする。

突き放し動作に類似した運動であるのが、踏み切り動作である。そのために、まずロイター板（≠踏み切り板）での踏み切り動作に触れておくこととする。ロイター板による踏み切り（足支持）動作は、通常の地面での跳躍と大きく異なる。通常の地面での跳躍動作は、地面に対して意識的に働きかけ、蹴ることで上体が空中へ投げ出されるのに対して、ロイター板を使った跳躍では、ロイター板を蹴るのではなく、ロイター板に運動者が働きかけ、その後のロイター板からの働きかけによって空中へ投げ出されていくのである。ロイター板からの働きかけをからだで受け止めるためには、からだを緊張させ、「しめる」ということが不可欠となってくるのである。写真1、写真2、写真4の〈踏み切りII〉をみると、ロイター板からの働

きかけをからだは受け止めることができないために、膝が折れてしまい、前方へくずれているとみることができるのである。

つまり、第一空中局面の運動を受け止め、大きな第二空中局面を生む腕支持においても、第一空中局面から腕支持にかけてからだをしめ、跳び箱に働きかけることによって、跳び箱が第二空中局面に投げ出してくる（突き放される）のである。

さらに言及すると、「しめる」ためには、反対に「緩める」ことが大切となってくると言える。生理学的にみても、筋肉の筋繊維を1つ取り出せば、働くか働かないかのどちらかであり、働くときは全力で働き、休む時は完全に休むために、中途半端に働くことはあり得ない（羽鳥，2004，p.35）とされている。すなわち、からだは緩んでいる（多くの筋繊維が休んでいる）ことによって、次の運動では、新しい筋肉がより多く参加できることとなり、動きの力強さや可能性が豊かになるのである。これは、「無理をしなければ無理ができる」（羽鳥，2004，p.35）、「緩むからこそ次なる飛躍ができる」（羽鳥，2004，p.36）ということである。

このようなことから、ロイター板によって空中へ投げ出された第一空中局面では、からだは緩む、解放されるということによって腕支持における突き放し（しめる）が生まれ、第二空中局面で再び解放されていくのである。つまり、「しめる（緊張）－緩める（解緊）」ことによって生まれる局面が、先人が残してきた文化的な価値と言えるが、一方では、写真1でみられるように、からだは空中へ投げ出され、身をあずけることは、大変不安定な出来事であるために、からだは緊張し、恐怖を感じることも多々みられるのである。

#### (3) 「間」づくりとしての支持

これまで、「しめる－緩める」ことによって、前方から後方への左右軸回転への切り返しが起こり、大きな空中局面を生み出すと述べてきたが、大きな空中局面とは、「しめる－緩める」を切り替える「間」と捉えることもできるだろう。写真1、写真2、写真4の〈第二空中局面I〉が小さいために、からだは未だ緩んだまま、〈踏み切りII〉に入っているとみることができる。このような状況によって、強くロイター板に働きかけることができない、あるいは、ロイター板からの働きかけに対応できなくなっていると考えられる。その結果が、強く踏み切っている〈踏み切りI〉から〈第一空中局面I〉にかけての運動姿勢と、〈踏み切りII〉から〈第一空中局面II〉の姿勢に大きな違いが生まれていると言える。このように考えると、第二空中局面を生み出す、さらには、第一空中局面におい

て、からだが緩む状況にするために、腕支持、踏み切り（足支持）は「間」づくりとしての機能が必要になると言えるだろう。

## 7. 跳び箱運動の文化的な価値と運動技能の関係性

大学生を対象に行った本事例では、「連結跳び箱」という場の中で、切り返し系の技を行った。そこでは、非循環運動である跳び箱運動を循環運動に変えたことによって、第二空中局面により意識が向き、そのための腕支持の重要性を考えざるを得ない状況の設定になったと考えられる。

大学生を対象に行った跳び箱運動事例から支持について考察してきたように、跳び箱運動の空中局面を味わうためには、左右軸回転を生み出し、切り替えるという機能があること、また、支持を行うためには、「しめる（働きかける）－緩める（働きかけられる）」という相互関係が成り立っていること、そして、「しめる（働きかける）－緩める（働きかけられる）」が生まれるための「間」づくりとして大切な役割を担っていることが明らかにされた。

支持という視点から、跳び箱運動（切り返し系）の文化的な価値を味わうことができる運動過程を整理すると、図3のようになる。この運動経過から、跳び箱運動の文化的な価値と運動技能との関係を考えてみると、「左右軸回転の切り替え」の技能は、第二空中局面の運動姿勢を決定させ、からだを「しめる－緩める」、「間づくり」としての技能は、空中に運動者を誘うための技能であるために、「第二空中局面の雄大さ」という跳び箱運動の文化的な価値と運動技能は、表裏一体・相互補完の関係であることが明らかとなった。これは、障害を跳びこすための手段としての体重移動の技能の位置づけとは違った認識であるとみることができる。

断わっておくが、これまで述べてきたことは、跳び箱運動の「跳び箱を跳びこえる克服型の運動」という認識を、「大きな空中局面を獲得する達成型の運動」への転換を唱えるものではない。つまり、空中局面が大きく雄大であれば評価され、小さければ否定されるのではないということである。写真1、写真2、写真3、写真4のような姿は、現段階では跳び箱運動を特徴づける文化的な価値には触れてはいないが、もっと空中局面のおもしろさを味わいたいという興味をもちながら、運動へ参加しているかということが重要なのである。また、局面のおもしろさを味わうための入り口として、跳びこすこと（克服すること）がおもしろいということに触れさせることも重要だと言えるだろう。さらに、本事例で取り扱った連結跳び箱を行うことによって、だれもが跳び箱運動の文化的な価値を味わうことができるということではない。場を実体として捉えるのではなく、文化的な価値を生み出す関係をつくるための状況という視点からつくることが大切である。

また、空中へ身を投げ出す、からだの緩み、解放されるという経験は、子どもにとって恐怖を感じ、難しいと言えるかもしれない。しかし、先人が生み出し、継承されている跳び箱運動という運動文化に対して、一面的な「跳びこえる」ということに価値を限定するのではなく、運動者と器械との対話の中で、局面の雄大さが生まれ、広がりがある世界に子どもを誘うことが教師にとって必要である。

## 8. おわりに

本研究では、跳び箱運動とは、支持によって生まれる空中局面のおもしろさを味わうことが文化的な価値であると整理された。また、向山の「法則化運動」を批判的に捉えながら、おもしろさと支持の関係を検討してきた。そこでは、支持とは、左右軸回転を生み出

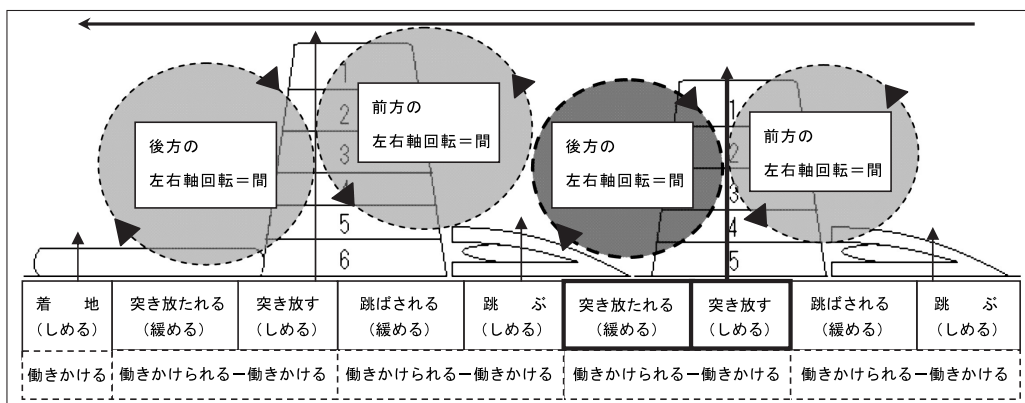


図3 文化的な価値を味わうことができる跳び箱運動（切り返し系）過程



す機能として働き、支持のためには「しめる（働きかける）－緩める（働きかけられる）」ことが大切であるということ、さらには、「しめる－緩める」の切り替えが起こるような「間」づくりとしての機能が不可欠な要素であることが明らかになった。この3つの視点を持ちながら、運動状況の設定、子どもの運動を観察することで、局面のおもしろさを味わうことが可能になると考察された。

本事例で扱った連結跳び箱によって、これまで軽視されがちであった第二空中局面への意識が強まり、より（腕）支持の意味を引き出すことができたと言えるが、場としては危険を伴い困難な場であるために、そのまま学校現場に取り入れるには、検討が必要である。そのため、子どもたちが第二空中局面の雄大さという文化的な価値に触れることができるような運動状況づくりが、今後の課題と言える。

相馬俊一（1992）太田昌秀編．小学校体育実践指導全集－4．器械運動－．日本教育センター．

#### 【引用・参考文献】

- 藤田英典（1995）学習の文化的・社会的文脈．佐伯胖ほか編．シリーズ学びと文化① 学びへの誘い．東京大学出版社，pp.93－126.
- 羽鳥操（2004）野口体操ことばに貞く－野口三千三語録－．春秋社．
- ホイジンガ：高橋英夫訳（1963）ホモ・ルーデンス．中央公論社．
- 堀江健二・小林幸子・尾西奈美・津端謙太（2007）器械運動．文化書房文社，pp.9－12.
- 生田久美子（1987）「わざ」から知る．東京大学出版会，p.88.
- 稲垣正浩（1987）跳び箱．岸野雄三編．最新スポーツ大事典．大修館書店，pp.897－898.
- カイヨワ：清水幾太郎・霧生和夫訳（1970）遊びと人間．岩波書店．
- 金子明友（1987）教師のための器械運動指導法シリーズ 跳び箱平均台運動．大修館書店，pp.3－84.
- マイネル：金子明友訳（1981）スポーツ運動学．大修館書店，pp.156－165.
- 森島和博（2006）学校体育における「学び」の再検討～状況主義の学習論に依拠して～．三重大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修修士論文：43.
- 本山芳子（1999）社会的環境との相互作用による「学習」の生成－総合学習における子どもの参加過程の解釈的分析－．カリキュラム研究，8：101－116.
- 向山洋一（1982）跳び箱はだれにでも跳ばせられる．明治図書．
- 長野淳次郎（1996）第IV章 新しい理論を生かした運動指導．金子明友監．吉田茂・三木四郎編．教師のための運動学－運動指導の実践理論－．大修館書店，pp.179－180.
- 佐伯聰夫（1999）再発見！器械運動の魅力－その原点と中核を考える．学校体育，52（12）：7－9.